

やはり最近の比企谷八幡の女の子事情はまちがっている。

八橋夏目

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡の周りの女の子による現状報告。

続編：やはり最近の俺の女の子事情はまちがっている。の方も宜しくお願いします。

目次

いろはのターン	1
雪乃のターン	4
南のターン	7
京華のターン	12
留美のターン	14
結衣のターン	20
陽乃のターン	25
千佳のターン	31
めぐりのターン	35
沙希のターン	40
かおりのターン	44
姫菜のターン	49
小町のターン	54

いろはのターン

最近、先輩の身の回り、というか女の子との接触が増えてきている。私を含めてこの腐ったような目の先輩を狙っている女の子は、私に分かっているだけでも私を含めて最低五人はいる。

この総武高校には葉山隼人というイケメンな男子生徒がいるけど、私たちはなぜかこの捻くれた先輩に惹かれてしまっている。

顔は葉山先輩の方がイケメンだし、多方面からいろんな、それも老若男女問わず好かれている葉山先輩の方が取り合いになっているのが現実だ。彼もそれを自覚しているし、そんな競争が表立って広がらないように、上手く躲している。

それに比べてこの先輩ときたら、全くのように私たちの好意に気づこうとしない。いや、結衣先輩のあからさまな好意には気づいているような節も見えるが、だからといって自分から何か行動を起こそうとはしない。

そんな彼が最近、女の子との肌の接触が多くなってきているような気がする。

特に結衣先輩が一番多い。

まあ、彼女の場合には隠してるつもりなんだろうけど、先輩への好き好きオーラが滲み出すぎいて、それが決壊したかのように事あるごとに先輩の腕に抱きつく習性ができている。前から、雪ノ下先輩に抱きつくのは目にしてきた（というかほぼ毎日見ている）が、先輩に対してはどこか一歩引いている節が見受けられていた。特に気の無い男子に対しても、あまりそういうことはしないって言ってたけど、先輩に対してはあからさまに我慢していた感じだった。それが、いつの間にか気づいたら抱きつく習性ができていて、先輩も嫌がるそぶりを見せない。以前だったら、強引にでも引き剥がしそうなもんなのに、今は当たり前のように受け入れている。

次に多いのは妹の小町ちゃんだ。

彼の妹で四月から総武高校にきて、私の後輩にもなるけど、先輩から聞いていた姿とは少し違った。なんというか妹が兄に抱きついてる感じがしないのだ。色があるというか、抱きついてる時の小町ちゃんの顔が時折艶かしいものになるのだ。当然先輩はそんな顔をしていることに気づきもしないし、シスコンだから嫌がるどころか待ち焦がれてくるくらいの勢いだしで。胸が当たってようが先輩の手が小町ちゃんのお尻に触れていようが御構い無しの状態なのである。

次に多いのはまあ私なんだけど。

先の二人の様子を見ていると私も先輩に触れたくなくなってしまふのだ。特に気負う必要のない先輩にはありのままの私で居られるし、あざとさを出すことで言い訳にもなつて、なんだかんだで触れてしまっている。二人みたいに抱きつくようなことはないが、ふとした瞬間に座っている先輩の肩に手を乗せてみたり、耳元でそつと囁いてみたり、手をつないでみたり。周りに人がいないようなところではしか私もできないけど、それでも先輩は嫌がる素振りを全く見せない。逆に、頭を撫でられたり手を握り返されてしまうのだ。戸惑う彼を見たいのにこれでは私の方が戸惑ってしまい、恥ずかしい姿を見られてしまっている。あ、あと一回だけ太ももを触られたこともあったなー。

で、素直になれない雪ノ下先輩はそれでかわいいものがある。普段は凜としていてかつこいいのに、私たちが先輩にベタベタしていると言書をしていてもチラチラこつちをみてくるのだ。しまいはプルプル震えだし、手を伸ばしては押さえつけたり、と触りたいのに我慢しているのが丸見え。そんな素直になれない彼女のために一度先輩と二人きりにしてみたら、膝の上に乗って抱きついていた。枷が外れるとこんなにも甘えん坊になるのに驚きだったのは、覗いていた三人だけの内緒である。とうかキスしそうな雰囲気になら行つたので、三人で乗り込んでやった。その時の二人が可愛かったから、またしたいと思ってしまう私はなんなんだろう。

そんなこんなで最近の先輩は私たちの好意に“気づいている”のか“気づいていない”のかよくわからない状態である。たぶん、気づいているんだろうな。けど、誰かを傷つけてしまうとか考えて今の状態に甘えているのかもしれない。まあ、それは私たちもなんだけどね。私たちの誰かが告白したら、たぶん今の関係は壊れてしまう。先輩が勝手にやらかすのは見えている。だから、私たちはこれでいいのかもしれない。でも、それが先輩の言う本物でもないような気がする。

あああー、もう、なんか面倒くさい。

とりあえず、先輩に抱きついてこようっと。

雪乃のターン

最近、奉仕部の備品改め、比企谷君がよく女の子と一緒にいるのをよく見かける。

特に私には興味がないことだけれど、気づけば彼が視界の中にいるのだから、いやでも目にしてしまう。

彼は密かに人気があるようで、彼のクラスでは由比ヶ浜さんを筆頭に様々な人たちが彼のことを気にかけている。その中でも由比ヶ浜さんと川崎さんと、あと海老名さんもかしら。彼女たちの中の彼はクルスの男子、というよりは一人の男となっているようで、時折彼女たちが比企谷君にアプローチをかけている。彼はそのことに”気づいている”のか”気づいていない”のかはつきりもしない態度でいるため、彼女たちも面倒な男に好意を寄せてしまったみたいで大変そう。だわ。彼女たち以外にもそういう女の子はたくさんいるのだけれど、私には彼のなにかいいのか全く理解できないわ。

そうね、彼の一日を少し見てみましょうか。

朝、彼は妹の小町さんと登校してくるわ。学年が違うため自ずと昇降口で別れることになるのだけれど、それまでの二人はとにかくベタとしている。小町さんが何かと彼の腕に抱きついては、胸を押し当てているようで、さすがにそれには気づいている比企谷君も顔を赤くしていたわ。それでも振り解こうとしないのが彼らしいのだけれど。羨ましいいわね。

教室に着くとまず彼に声をかけるのが由比ヶ浜さん。彼女は比企谷君よりも毎日先に来て、彼が教室に来るのを三浦さんたちと待っているわ。三浦さんたちもそんな彼女の行動が毎日続けば、習慣化しているようで「いつてらっしやい」と見送る始末。そんな彼女の後ろ姿を海老名さんが見ているのだけれど、彼女が行動するのはまだあとのこと。なにやら順番があるようで、女社会というものも面倒だと思う。

由比ヶ浜さんとはとにかく彼によく抱きつく。小町さんとはまた違って、胸に彼の腕を挟んでしまうのだ。しかもそれを無意識でやっているのだから、食べない子よね。一色さんの方がよっぽど可愛く見えてくるわ。

で、そんな由比ヶ浜さんに抱きつかれた彼は、まず豊富な胸の感触を楽しむように、腕の方に気を回している。なぜわかるのかと言われれば、彼がその間の会話をいつも聞いていないからだ。適当に流しているため頭にも残らない。残らないのは胸の方に集中しているからってわけ。

まあ、朝は大体こんな感じなのだけれど、休み時間がまたすごい。新学期になってから彼は川崎さんの隣の席になったようでよく二人で会話をしている。彼女の場合は結構恥ずかしがり屋なため、肌の接触はないが、その分昼休みになる彼とおかずの交換をしていたりするわ。それで高評価をもらおうとまた別の日に作ってきて、彼の胃袋を掴みにかかっているの。そんなことしているのは彼女だけだから、比企谷君にとってはそれがまた新鮮なのかもしれない。

ただ、昼休みは毎日川崎さんが彼を独占しているわけではない。違う日には海老名さんがここで彼と接触を凶っている。彼がベストプレイヤーと呼んでいる渡り廊下のところを捕捉し、二人きりの状況に持ち込んでいる。彼女の趣味は比企谷君の趣味と合致するところがあり、会話がよく弾んでいる。あのコミュ障の彼があれだけつらつらと話しているのは、千葉のことについて語っている時か、彼の持論を語っている時にしか見たことがない。そういうところを見るとなんだか悔しくなってくるのだから人間って不思議よね。

放課後になると戸塚君が彼と妖しい関係を築いてから部活へと行く。そして、その後によく由比ヶ浜さんと二人で肩を寄せ合いながら、奉仕部へとやってくるわ。

え？ 一色さん？

彼女はここからよ。学年も違えば生徒会の仕事で忙しくしている彼女は生徒会を出汗に彼を連れて行くのよ。断ろうと思えば断れることなのだけれど、彼女の場合は言葉の一つ一つ、行動の一つ一つが

武器になってしまふのだから結局従わざるを得ない状況になつてしまふ（主に私や由比ヶ浜さんがだけど）。二人きりの生徒会室でなにをしているのかは知らないけど、彼女が暇を持って余して部屋に来る時は彼とのスキンシップが尋常じゃない。見る角度によつては一方的にキスをしているかのようにも見えるのよ。そして、それを見た由比ヶ浜さんが対抗心を燃やして彼の腕に抱きついて、小町さんも悪ノリして彼に抱きついて……………。

と思いきや、ある日そんな行動をした後の三人が部屋からいなくなつた時間ができたの。

だから、私もー！。

と、まあ、こんな感じに比企谷君はどうしようもない女たらしであることはわかつてもらえたかしら。

思い出したら腹が立ってきたわね。今度はどうしてあげようかしら、ふふふつ。

南のターン

最近、あいつの周りがすごいことになっている。教室じゃ結衣ちゃんたちに囲まれて、放課後には生徒会長と一緒にいるのをよく見かけるのだ。

そもそもうちがあいつのことを認識したのは去年の文化祭の時。実際には夏休み中の花火大会で結衣ちゃんと一緒にいたらしいけど、それは後になって気づいたことだ。

文化祭の準備が始まった時、うちは実行委員に立候補した。その時は誰もやろうとしないからうちがやれば周りからも好印象で見られるかも、という軽い気持ちからだ。実際に実行委員が始まってからも実行委員長に誰もなろうとしないから実行委員長になった。たぶんそこから色々と崩れていったんだと思う。

軽い気持ちで始めた実行委員長は思いの外、うちには手にあまる役職だったようで、場を仕切りながらもうまく回るように頭の中で先を読んでいくことが難しかった。だから、同じ実行委員にいた雪ノ下さんに副委員長になってくれるように頼み込んだ。

彼女は校内では誰もが知る秀才で、副委員長としても十二分の才能を発揮していた。彼女が指示を出すようになってから仕事の能率が早まり、少し緩めてもいいくらい余裕さえできていた。そんな彼女を見てみると自分が実行委員長になった意味を見失ってしまった。すると、そこから段々とクラスの方に顔を出したくなり、委員会には遅刻するようにもなった。そんなある日、余裕があるということでもクラスの準備にも参加できるように言った。これでうちも気兼ねなくクラスの方にいられるし、これでこそうちが求めていた文化祭だとも思った。

だけど、余裕のあった時間は人手不足で仕事が停滞しており、これでは文化祭を迎えられないというところまで来ていた。うちがそれに気づいたのは文化祭のテーマを決める際に全員が集まった日。元々、うちを含めてほとんどの生徒がクラスの方を楽しみたいという

思いが強く、会議にはやる気が一切感じられなかった。そんな中であいつはうちに爆弾を落としてきた。

『人　よく見たら片方楽してる文化祭』

それがあいつが掲げた文化祭のテーマだった。

聞いた時には思わず絶句してしまった。

よくこんな場面で自分が楽したいがためにそんなこと口にできるな、と思った。

雪ノ下さんのお姉さんはバカだと言っていた。うちもそうだと
思った。

当の雪ノ下さんもあいつの説明を聞いた後、紙束で顔を隠して笑い、笑顔で却下した。

そう、全員に否定された。でも否定されたのにあいつは平然としていた。まるでうちらを嘲笑うかのように。

それからは全員強制参加となり、やってくれたなと思った。あいつはうまく雪ノ下さんを使って自分が楽になるように仕向けたのだ。まあ、雪ノ下さんにより仕事がなくなることは全くなく、逆に増えたりもしてたけど。それでもあいつは何も言わず全てをこなしていた。みんなの目には敵が黙々とやっているように見えたのだろう。俄然、やる気を出したみんなの”おかげで無事準備は全てが終わった。

その間、うちはただ・判を押しているだけだった。

ああ、うちっぺいらない子じゃん……………。

そう思ってしまったからには全てが負の連鎖だった。オープニングセレモニーでの実行委員長挨拶では緊張しすぎて言葉が続かなくなるし、何でもできる雪ノ下さんを見ると自分が惨めに思えてしまった。

それともう一人、普段はマンガとかでいうところのモブキャラにしか過ぎないあいつが優秀だったことがさらに負のスパイラルへとうちを引きずり落とした。

何時間、屋上にいたのかはわからない。今、体育館で何の催しがさ

れているのかもわからない。そんなことを風に流していたら――

――あいつが来た。

なんで来たのがこいつなのだろう。なんで葉山君じゃないんだろう。結局誰もうちのことなんて……。そんな考えが頭を過ぎったが、すぐに葉山君たちも駆けつけてきた。うちを連れ戻そうと必死に説得してくるが、こんな迷惑をみんなにかけたうちは最低だと口にしたら、それは他人の言葉としても突きつけられた。

あいつは全て分かっていたのだ。何も知らないくせに何もかもを見透かされているようだった。

あいつはうちの核心を言葉でついてきた。でも言葉を返せないでいると代わりに葉山君があいつの襟首を掴みかかった。気づけばいろいろとこみ上げてきたものが全てあいつに対する怒りに変わっていて。

なんとかエンディングセレモニーを終わらせて、実行委員長から解放された。

次に学校に来た時にはあいつの悪評が学校中に広がっていた。いい気味だと思った。うちを散々馬鹿にしてくれたんだ。これくらい普通だ。

程なくして、体育祭の準備が始まり、今度は雪ノ下さんたちの方からうちに実行委員長になるように頼み込まれた。なんでうちが、とは思ったが葉山君がまたしても賛同してくれたので引き受けることにした。

今回は特に問題はなく順調に進んでいた。なのに、競技の内容で遥とゆっこと対立することになってしまった。文化祭では友達だったはずなのに。あれだけ、あいつのことを一緒に馬鹿にしていたのに。うちはすでに首脳部グループの人間としてみられていたらしい。それで気づいた。人間関係とはこんなにも脆く壊れやすいものだった。

たんだ。

どうしていいかわからないまま時間は過ぎていき、首脳部だけの会議を開いた時に漚れからのことを話し合った。いろんな意見が出る中で、またしてもあいつは爆弾を落とすとした。

それは体育祭そのものを人質に取るものだった。よくこんな最低な考えが思いつくなど思った反面、なぜか悔しくもなった。みんな、雪ノ下さんも結衣ちゃんも生徒会長まで理解を示していたのだ。だから、うちも腹をくくることにした。たぶん、これであいつの驚いた顔が見れる。これで、あいつに一泡吹かせることができるのなら安いもんだとさえ思った。

会議当日にうちは決行した。それはとにかく謝ることだった。みんなの前でこれだけ謝ってしまったばうちに、うちらに反論する気が起きない、そう確信があった。それはうち自身が文化祭で経験したから。

とにかく泣いて詫びて退場した。部屋を出てから、いろいろと文化祭のことが蘇ってきた。たぶん、あいつもあの会議の後はこの気分だったんだろう。

ああ、そうか。うちはあいつに助けられたんだな……………。

あいつがいなければ文化祭の後の標的はうちに向いていたんだ。それをあいつは同情を煽ることであいつがやらかしたことを隠してしまったんだ。

たぶん、それからだと思う。うちがあいつのことを目で追うようになっていたのは。

だけど、あいつに近づこうとは思わない。あいつの周りにはすでに何人もの美少女がいて、うちなんかがいたところであいつの目には映らないから。

でもようやく、結衣ちゃんが彼を気に入ってるのを理解できた。表には出さないがいつの間にか助けられてる、そんな不器用な優しさに惹かれているのだろう。それはたぶん、雪ノ下さんも同じで。

三年になってからのあいつは拍車がかかったように女の子に詰め寄られている。クラス内だけでも結衣ちゃんに川崎さんに、あと戸塚君もなのかな。

それ以外にも今の後輩生徒会長や妹だと思われる一年生に毎日のように抱きつかれている。そんなあいつを遠巻きに見ているのはうちと雪ノ下さんくらいだろう。逆になぜあの雪ノ下さんが見ているだけなのかもわからないけど、毎日教室付近で見ているのは怖いからやめてほしい。

そう言えば、この前出かけた時にも見たことのない女の子と歩いてたっけ。小学生か中学生くらいの子と手をつないで歩いているのを見た。顔は似てないしアホ毛もないから、たぶん新子の女の子だろう。あいつ、いつもぼっちぼっち口になっているけどうちよりも交友範囲が広いことに気づいてるのかな。

まあ、それよりも今はこの目の前の状況をどうにかしてやりたい。なんなのこれ。うちに対する嫌がらせかなんかなの。

うちの前の席では腕を結衣ちゃんの胸に挟まれ、楽しく川崎さんと話しているあいつがいる。

なんかいろいろと思いついていたら、段々腹が立ってきた。

「ちよ、なんだよ、相模。やめ、消しゴム投げんな」

ふん、うちの目の前でいちやいちやしてるアンタが悪いんだから。バーカバーカ。

京華のターン

さいきん、さーちゃんとはーちゃんがなかよしさんなの。おうちでもまえよりはーちゃんのおはなしをしてくれるようになって、けーちゃんもうれしいの。

はーちゃんはね、とつてもやさしいんだよ。このまえなんかね、おやすみの日におそとにおさんぽにいったときにね、こうえんにはーちゃんがいたの。はしつてできついたら、そのままかいたかいしてくれたんだよ。そのあとはね、はーちゃんとさーちゃんとすなばでお山をつくったり、とんねるをほったりしたんだよ。でもね、ときどきさーちゃんとはーちゃんの目があうとね二人ともおかがまつ赤になつたの。おねつでも出たのかとおもつてけーちゃんのおでこでおねつをはかってあげたらね。二人ともすなばでごろごろころがりだしたの。それでね、こんどは手と手がふれてまたおかがまつ赤になつちやつたんだよ。二人ともどうしちやつたんだらうね。

おひるごはんのじかんになったから、はーちゃんとバイバイするこたになつたんだけど、ちようどそのときにね、茶色いかみのおねえちゃんがはーちゃんにだきついてきたの。はーちゃんはいきなりだつたからおどろいてただけどね、そのときはーちゃんのおかおがかわいかつたんだよ。なんだか、さーちゃんみたいでね、ほんとうにかわいかつたの。とおもつたらそのおねえちゃんのことさーちゃんも知つてるみたいで、おどろいてたの。はーちゃんとさーちゃんおんなじおかおー。

それからね、たくさんのおねえちゃんがきたんだよ。おむねの大きいおねえちゃんや黒くてながいかみのおねえちゃん。あとクリスマスパーティーのときに、げきのしゅやく？ をやってたおねえちゃんとね、はーちゃんの妹のおねえちゃんもいたよ。はーちゃんはみんなとすぐくなかよしさんで、みんなではーちゃんをとりあつたんだよ。たしかこういうのをしゅちにくりん？ っていうんだよね。はーちゃんうれしそうでけーちゃんもうれしかったよ。さーちゃんもま

ざればよかったのに。さーちゃんはいっつもがまんばっかりしてるんだから、こういうときくらいはーちゃんにあまえればいいのにねー。はーちゃんもよろこぶとおもうんだけどなー。

そのあとね、みんなでおひるごはんをたべることになったんだよ。はーちゃんがサイゼっていったらみんなバカにしてたんだけど、けつきよくみんなついてくるの。みんなすなおじやないよねー。けーちゃんはすなおだからはーちゃんとサイゼにいけるっただけでこんなにもウキウキしたのははじめてだよ。

サイゼについたらねまずはせきのとりあいからはじまったの。はーちゃんのとりにだれがすわるかでジャンケンになったんだけど、もちろんけーちゃんのはーちゃんのおひぎの上だよ。はーちゃんの右にはさーちゃんがすわって、ひだりには茶色いかみのおねえちゃんがきたの。はーちゃんはいっつもドリアをたのむんだって。はーちゃんのドリアがきたのを見てたらね、はーちゃんがアーンしてくれたの。あつくてやけどするかとおもったけど、おいしかったよ。さーちゃんからはパスタをアーンしてもらっておなかいっぱいになったの。そしたらね、ねむくなっちゃったからねちやった。ごめんね、はーちゃん。たべづらかったよね。おわびにこんどはけーちゃんのはーちゃんにアーンしてあげるからね。

かえりに目がさめたらはーちゃんのせなかにいたんだー。あつたかくてきもちよかったのはいしよだよ。みんながうらやましがっちゃうからね。

あ、そろそろおひるねのじかんだからこれでバイバイだよ。またねー。

留美のターン

最近、私は休みの日は八幡といることが多い。中学生になってからというもの、少し私の中での行動範囲が広がってしまったようで、たまに八幡の家に行ったりしている。小町さんが快く迎え入れてくれるから、土曜日でも朝早くから八幡の家に行っては起こしたりしている。

ぶつちやけ、八幡は年下には甘い節があるから私がこんなことをしていても全く嫌がりはない（口では色々と言葉を捏ねくり回しているけど）。まあ、でもこうなったのには理由がないわけでもない。

中学生になったばかりの四月の中頃。街を歩いていると去年のクリスマスパーティーで場を仕切っていた八幡の高校の生徒会長が、うらやましいことに八幡と肩を並べて歩いていた。しかも二人だけで。生憎、二人に見つかりはしなかったけど、八幡が心配になって後を追ってみることにした。

和気藹々、とまではいかないにしても、生徒会長が話してるのを見る限り楽しそうだ。それと、どうも聞こえてくる会話から推測するに、その日は彼女の誕生日だったらしい。

ああ、だから他の二人はいないわけだ。彼女のことだから特別な日である誕生日を武器に八幡を独占したのだろう。そこに八幡の意見はなかったのは聞かなくても分かる。かわいそうな八幡。大丈夫だよ、もうじき私が癒してあげるから。

それからは二人で雑貨屋に行ったり、ラーメン屋に行ったりしていた。どうやら以前にも八幡は彼女をお気に入りラーメン屋に連れて行ったことがあるらしく、その日は生徒会長さんのリクエストにより、再び来店することになったんだって。私ももう少し早く生まれてれば、ああやって八幡の横に並んでお出かけできたのかな……………。

取り敢えず、私はコンビニで買ったあんパンと牛乳を片手に遠巻きながら八幡たちがラーメン屋から出てくるのを待っていた。案外、私はぼーっとしているのが好きなようで、八幡たちが出てくるまでの間

もそれはそれで楽しかった。

ラーメン屋を後にすると今度は「卓球しましょう」とか生徒会長が言い出し、ゲームセンターに行くことになった。あ、私この時初めてゲームセンターに一人で入ったんだよね。そもそも行ってもお金がないから、お父さんと買い物に行った時にモールにあるゲームセンターで時間をつぶすくらいだ（つまりお父さんと出かけることが滅多にない）。でも音楽ゲームをするための専用のカードは持ってたりするんだから、不思議だよね。

取り敢えず、卓球台の近くにあつた十六マスの叩く音楽ゲームで時間をつぶすことにした。視界の端に二人の姿を映しながら、八幡が好きそうなアニメの曲を選択する。レベルはまだ7が限界。8じゃちよつとが難しくくてクリアできないんだよね。この曲はレベル6だから準備運動としてはやりやすいだよね。

一曲目が終わって二人を見ると二人は卓球に没頭していて、私がそばにいないことには気づいていない様子。この分では後三十分くらいはやってそう。私は二曲目を選択して意識をゲームに戻す。横の高校生くらいの男の人の腕が目で追いつけないくらい動いてるのは見なかったことにしよう。私じゃ、あそこまでできないしね。

二曲目も終わってラスト一曲。最後は何かレベル8の曲でもやろうかな、という気分になり夏用ベストを身につけた制服の女の子が二人描かれている画像を選択。この曲の原作がなんなのかはわからないけど、たぶん八幡に聞けばわかると思う。そのうち聞いてみよう。

それから。

やったよ！ 判定Cだったけど一応クリアしたよ！

すごく指が痛いけどね。

って、ああそういえば私は八幡たちを追いかけてたんだった。二人はどうしてるかなー。

……………意外と八幡が勝っていた。

へー、八幡って卓球強いんだ。あ、それとも生徒会長の方が弱いかな。

後ろにも人が並んでいるので、卓球台近くのベンチに移動した。
より近くはなつたけど、いかんせんゲームセンターはうるさいので
二人の声は聞こえない。

あーあ、楽しそうにしちゃって。ここで私が乱入したらどうなるの
かなー、怒られるかなー。でもいいなー、混ざりたいなー。
なんて考えていたら。

バツチリと・

二人と目があってしまった。

二人は声をそろえて「あ、」と固まっていたが、私はじつと見続け
る。なんかちよつと見つかったのが嬉しかったりするから、声とか
出そうものなら顔がフニヤケちやいそうだった。

生徒会長は何事もなかったかのように「次いきますよー」とサーブ
の構えを取る。だけど、それを八幡は許さなかった。

八幡は私に声をかけてくれた。それを見た生徒会長も「はあ
……………」と深いため息を吐いて、こっちにやってきた。

なんでいるのか聞かれたので、真つ正直についできたことを打ち明
ける。それを聞いた八幡は一步私の方によってきたが、今度は生徒会
長の方がそれを良しとはしなかった。私を自分の胸の中に抱き寄せ
ると「こんな幼気な美少女まで先輩の毒牙にかける気ですか！ させ
ませんよ、させませんからっ！」なんて言い出した。私は人形よう
に固まったまま聞いていたけど、この人私をまだ小学生扱いしてるの
かな。一応もう中学生なんだけどなー。

というか、毒牙って何？

しかも「まで」っていうことは他にも毒牙にかかっている人がい
るってこと？

ああ、そういやすでにここに一人いたよね。亜麻色の髪で私の鼻を
くすぐってくる人が。

それからはなぜか三人で街を巡ることになった。何気生徒会長も

年下には甘いよね。まあ、私はそれを分かった上で受け入れてるから、何も言える立場じゃないけど。

その日は街中で解散したから特に何もなかったんだけど。

週明けの月曜日。その日はなぜか無性に八幡に会いたくなってしまう。放課後、私は気がついたら総武高校の前に行っていたんだから、相当重症だよ。中学生が高校の前にいるのはどうにも違和感がある。ぽつぽつと昇降口から出てくる生徒の流れを眺めながら、八幡の姿がないか探してみる。

.....

.....

.....

出てこない。

それから数十分。

今更だけど、八幡って奉仕部とかっていう部活に入ってたよね。これって結構待たなきゃいけないやつじゃない？

まあ、空でも見てようかなーと上を向くと金髪のウェーブのかかった髪の人と目があった。

どうやらあっちも目があったことに気がついたようで、じつと見つめてくる。

ああ、千葉村に行った時にいた金髪の人だ。

彼女もようやく私が誰なのか分かったみたいで声をかけてきた。

取り敢えずここに来た経緯を話すと「はあ.....最近のヒキオは.....」と深いため息を吐いた。スマホを取り出すと誰かに電話をしないで、しばらくすると大きな胸が揺れているのが視界に入った。

あれは確か八幡とよく一緒にいる二人の片割れの.....胸だけがでかいアホっぽい人。

無事に私の受け渡しが終わわり、入校許可証をもらって、奉仕部へと連れて行かれた。意外とそういうところには気が回るんだよね、この人。それとも八幡の差し金なのかな？

奉仕部に着くと待っていたのは千葉村で見たメンバーに生徒会長

だった。あれ？ 生徒会長って奉仕部の部員なの？

それからは生徒会長が持ち出してきたパイプ椅子に座って、出された紅茶をありがたくいただく。うん、おいしい。やっぱり、未来の私（みたいな黒長髪の人）は何をしても完璧である。私も紅茶の入れ方とか勉強した方がいいのかな。

なんてゆったりしていると八幡に心配されてしまった。「中学でも友達が………」とか言ってきたため私は首を横に振った。確かにすぐに友達ができたってことはなかったけど、八幡がこれまでに道を示してくれたから惨めな思いはしてない。それ以上に今は八幡の方が心配だった。土曜日の誕生日デートを見る限り、他にも八幡を狙っている人がいるのが分かった。それが理由でできたことを伝えると、女性陣が顔を赤くした。妹の小町さん以外は色々と言葉を捏ねくりまわして否定はしていたが、ぼそつと「八幡みたい………」って言ったら、急に黙ってしまった。なんかこの人たちで遊ぶのも楽しいかも……。

それからは改めて中学生になったことを祝われたり、制服姿を八幡に褒めてもらえた。

あと連絡先も交換した。

たぶん、これが大きかったんだろうな。

その日から八幡や小町さんたちと連絡を取るようになり、二週間くらい経った頃の土曜日に八幡の家に行くお許しがもらったのだから。ここから比企谷家訪問が始まったと言っても過言ではない。

そして今日も行くことにしてただけど。ちよつと寝坊した。心地いい天気で寝つきが良すぎたのが悪かったのだ。私が悪いわけではない。

十一時過ぎに比企谷家に着くと八幡はすでに起きていて、九時過ぎには近くの公園に行ったらしかった。珍しいこともあるんだね。あの八幡が休日に早起きするなんて。それから少し雑談をして小町さんと二人で公園まで行くと青みのかかった長い髪の女の人とその人に似た小さい子と一緒に砂場で遊んでいた。あれ、八幡だよね………？ 休日の昔のお父さんみたい。それから三人の様子をべ

ンチに座って見ていると、女の人と手が触れ合って顔を赤くしてたり、小さい子におでこをピトつと当てられて、二人して砂場でごろごろ転がり始めた。周りに人がいないからいいけど、すごく気持ち悪い光景だった。

それからしばらくして三人が立ち上がると、どこからともなく現れた生徒会長によつて、八幡が捕獲されてしまった。しかもちようど公園の反対側の入り口からは奉仕部の二人がやってくる始末。右を向くとニコニコを小町さんが笑っていた。ああ、この人が呼んだのか。これはもう私達も行くしかないよね。

待っててね、八幡。いつか私の気持ちを伝えられるように私がんばるから。

結衣のターン

最近のあたしは、というかあたしの身体が変だ。無性にヒツキーに抱きつきたくなるのだ。今まではこういうことがなかったはずなのに……、そりゃゆきのんには抱きついてたけどさ。なんていうか、こうヒツキーを見ると身体が熱くなって、ヒツキーの傍に行くと無性に触りたくなって、ヒツキーの匂いがすると我慢できなくなるの。身体の芯が燃えるように熱くて、ヒツキーに触らないとその熱が取れなくなつて……。

なにか原因でもあるのかなー。

そもそもヒツキーこと、比企谷八幡は総武高校の入学式の日にあたしのペットであるサブレを助けてくれた恩人。身を呈してかばってくれたの。足の骨を折って入院しちゃったけどね。だから、家の方には謝りに行ったけど、本人には会えていない。病院に直接行けばよかつたんだろうけど、そんな勇気があたしにはなかつた。だって、悪いのはあたしであつて、あの黒い車の運転手さんも巻き込まれたようなものだし、彼に至つては骨まで折っちゃってるんだから、多分絶対確実に怒られることは分かつていた。それに彼に身体とかを求められたら……とか色々考えちゃつて、結局会いには行けなかつた。

それから彼が学校に来るようになって、同じクラスなのにずっと一人でいる彼の姿しか見たことがなかつた。特に人と関わろうともせず、かといつて不良のような素行の悪さも見受けられない、ただの男子生徒でしかなかった。確かに、遅れてクラスに加わればすでにグループはできてるから入りづらいし、新たにグループを作れるような一人者はすでにいなかった。だから、彼が一人でいるのはあたしのせいだと思つていたけど、どうすればいいのか全くわからなかつた。

テニス部に入った彩ちゃんによると体育の選択授業でテニスを選んだらしい。そこでも一人で壁打ちをしてたんだって。もうこれ、あたしのせいではないよね。

そのまま彼との接点は全くないまま、無事に二年になった（危なかったけど）。またクラスも彼と同じで、その頃にはあたしの中での彼はヒツキーという愛称になっていた。だって、ずっと一人でいるし、時々本を読みながらニヤけるからキモくて、まるで引きこもりの人みたいだったから……あたしのイメージでしかないんだけどね。でも二年になっちゃったんだし、そろそろお礼も言わないとヤバイかなーと思い、クツキーでも作ってきつかけ作りから始めようと考えた。でもそもそもあたしクツキーの作り方なんて知らないし、ママに言ったら絶対からかわれるから頼みたくないし。

で、そんな時にたまたま平塚先生が声をかけてくれて、奉仕部というものがあることを知った。名前のごとく、便利屋みたいなのかなーって軽い気持ちで、翌日教えてもらった空き教室に行くと、綺麗な黒長髪の女子生徒とー

ー目目の腐った男子生徒がいた。

いやもうね。ただただびっくりだったよ。

いつも一人でいるヒツキーが部活なんかに入ってたんだから。でもちよつと困ったことになった。

渡す本人に相談とかいろいろとヤバくない？ ヤバイよね。絶対、気付かれちゃうし。

どうしようか悩んだけど、結局相談することにした。だって、ヒツキーの好みの味とか知るチャンスじゃん。

それから調理室の方に移動してクツキーを作ることになった。材料はいつの間にか用意されていた。先生が前日にゆきのんに教えてたのかな。来ることわかってたっぽいし。あ、ゆきのんってのは雪ノ下雪乃ちゃんのことね。あたしが雪乃ちゃんとかなんか笑える。ゆきのんはやっぱゆきのんだよ。

でー、なんで焦げ焦げになっちゃったのかなー。ヒツキー曰く「ジヨイフル本田に売ってる木炭みたいなもの」だって。超失礼だし！

やっぱりあたしには才能がなかったみたいだね。

なんてことを口にしたら、ゆきのんに怒られたのは熱い思い出。たぶん、あれがなかったら、あたしは今のあたしではイラレなかったと思う。そりゃ、今でも周りの空気を読んじやうけどさ。あの時ゆきのんに指摘されなかつたら、意見を言おうだなんて思いもしなかっただろうからね。そういう意味ではゆきのんもあたしの恩人だ！

それからヒツキーがそんなあたしたちを見て、十分後に来いとか言って調理室から追い出された。その間、ゆきのんと他愛もない話をして時間を潰し、戻ってくると焦げ焦げのクッキーが用意されていた。なんだ、ヒツキーもクッキー作るのが下手なんじゃん。あんな得意げに言つてたくせに……。とか思ってたなら、あたしのクッキーだった。自分のを食べてまずいとか思っちゃったよ……。なんかヒツキーっていいわるだ。

ヒツキーが言うには世の男子は手作りクッキーを女の子から貰うというイベントに心が揺れるのであって、味はその次なんだとか。よくわかんないけど、ヒツキーがそういうんだから、ヒツキーも揺れるんだよね。それを理解したら急に胸を締め付けられる感覚に陥った。

あたしはそそくさと帰る準備をして逃げるように帰った。

ヒツキーは喜んでくれるんだ。でもやっぱりおいしいものを食べて欲しいな。

それから、数日経つてもう一度、奉仕部へと向かった。練習の成果を見せるためだ。あとお礼も兼ねて。

てのが、ヒツキーに近づけたきつかけだ。それからあたしも奉仕部に入って、まったりとした時間を一緒に過ごした。そりゃ、あたしたちも人間だし、喧嘩とか意地の張り合いとかもしたよ。ほとんど、ヒツキーが悪いんだけど。それでも助けられた女の子はたくさんいる。・沙希や留美ちゃんやさがみんなにいろはちゃんも。もちろんあたしやゆきのんも助けられた女の子の一人だ。こうしてみるとヒツキーの周りには魅力的な子がたくさんいるんだよね。みんなにヒツキーのどこがいいのかを聞けば、たぶん最初に出てくるのは「分

からない」だろう。顔は整った顔立ちをしてるし、目を瞑っているヒツキーはイケメンだ。なのに、あの濁った目がその全てを台無しにしているのだ。

でもヒツキーを狙う女の子は学校内には止まらない（あ、留美ちゃんも小学生……今はもう中学生か）。ゆきのんのお姉さんの陽乃さんや”けーかいたいしよー”としては海浜の折本さん？ も危険人物である。陽乃さんは言わずもがなで、ヒツキーにちよっかいはかりかけてくるし、もつと危ないのはヒツキーの中学の同級生である折本さんはかつてヒツキーが告白したことがある女の子なのだ。今でこそヒツキーはそんな気は全くないって言ってるけど、今度はあつちが狙ってくるって可能性がある。どうもヒツキーは中学の時とは随分変わっているようで、折本さんが心変わりしないとは限らないもん。

ああ、ダメだ……………。

ヒツキーが誰かに取られちゃうかと思うとまた体が熱くなってきた。まだ原因がわかってないのに……………。しかもまだ授業中なのに……………ああ、どうしよお……………。

ちよつと態勢を変えるだけで、体の内側にある疼きが広がっていく。

やばいよお……………、あと五分もあるよお……………。

ヒツキーに触れたい、ヒツキーに触れたい、ヒツキーの匂いを嗅ぎたい、ヒツキーに抱きついて安心したい。ヒツキーと……………ああ、ダメダメ！ それはまだ……………はやいよお……

……キーンコーンカーンコーン。

や、やつと終わった……………。あとは挨拶だけ……………。あたし本当にどうしちやっただらう。今までよりも悪化してるじゃん……………。ヒツキーのことを考えるだけで体が熱くなって、ヒツキーのことを考えるだけで触りたくなって、ヒツキーのことを考えるだけで匂いを嗅ぎたくなる。匂いを嗅いじやったら我慢がきかなくなるというのに、

体の芯が燃えるように熱くて、疼く。たぶん今抱きついたも熱は収まらないようにも思える。

けど、あたしは我慢なんてしない。

欲しいものは全部手に入れたいから。

ヒツキーもゆきのんも絶対手に入れて見せるんだから。

ヒツキー、ゆきのん。

あたしががんばるから！ 見捨てないでね……………。

陽乃のターン

最近の雪乃ちゃんの様子がおかしい。

まるでストーカーのように比企谷くんを観察している。

いろんな意味で心配になって、よく顔を出すようにしているけど、会うたびに比企谷くんの話ばかり。やれ彼がこんなことを言っていた、やれ周りの女の子たちが彼を取り囲んでいる。やれ自分も混ざりたいなど……。自覚してないんだろうけど、どんだけ比企谷くんのこと好きなのよって感じよね。一度、それを言ってみたら「ば、馬鹿なこと言わないでくれるかしら。わ、わわ私は別に比企谷君のことなんて何とも思っていないし、ましてや好きだなんてそんなことありえるはずがないじゃない。ええそうよ。そもそもどうして私があんな誑し谷君のことをそ、その、す、好き、だなんて考えに至ったのかそこから説明して欲しいものね」だって。すごく目が泳いでて比企谷くんみたいだったってのは言わないでおいた。言ったら絶対泣き出すから。お姉ちゃんはそこまで鬼じゃないんだぞっ☆

それとあの子、名前何ガハマちゃんだっけ？ まあ、あのお団子のガハマちゃんのことも溺愛してるわね。今日は何回抱きつかれた、唇がほんの数センチまで迫ってきた、たまに顔が赤い時があつてしかも震えだすから心配だ、などなど。我が妹ながらにしてなかなかの逸材になってしまったような気がするわ。そのうち捕まらないか心配よ。

でもちよつと雪乃ちゃんから伝え聞く比企谷くんも異常なようにも思えてくる。

まず、そもそも彼は基本ぼっちだったはずだ。過去に何があつたのかは知らないけど、社会に対しての偏見というか屈折した見方を持っている。しかもどこかしら雪乃ちゃんに通づるものがあり、なのにあの子とは対照的に対人スキルが身に備わっていないコミュ障というちよつと変わった子。でも雪乃ちゃんにとっては色々と殻を破るきっかけを与えてくる男の子で、ゆくゆくは雪乃ちゃんの婿にでもと私は考えてる。

そんな彼が雪乃ちゃん曰く、言葉通りの女誑しになってしまってい

るみたいなのだ。確かに、彼の周りには彼に惹かれている娘がたくさ
んいる。雪乃ちゃんを始め、ガハマちゃんに一色ちゃんにめぐりはど
うなんだろう……。あと隼人のお友達も一人陥落してたわね。しかも
小学生……。あがりの中学生か今は……。にも手を出しているらし
い。あ、それと一番危険なのが妹ちゃんだったわね。彼の一番身近に
いて、みんなが知らない彼のことまで知っていて、なおかつ彼はシス
コンだからいつ間違いが起きても不思議じゃない。んーまあ、比企谷
くんだし大丈夫だとは思うんだけどね。ヘタレだし……………。

翌日。

結局、心配なので来てしまいました。

んー、来たはいいけどそもそも私は何が心配なんだろうね。雪乃
ちゃんのストーカー癖かなー。それとも比企谷くんが間違いを犯し
てしまうことかなー。ま、彼に会えばなんとかなるでしょ。

それから奉仕部の部室へと行き扉を開くとー

……………何か見てはいけないものを見た気がするわ。

一度扉を閉めて、再び開けるとー

ーああ、夢じゃなかったみたいね。

比企谷くんはいた。ちゃんといつものように読書をしている。う
ん、彼は特に変わってはいない比企谷くんだ。

問題なのは彼の周りにまわりつく三人の女の子。と対極の位置
にいる二人の女の子。二人組の方は言わずもがな、雪乃ちゃんとガハ
マちゃんである。なんか密着しすぎでゆりゆりしく感じるけど、今は
そっとしておこう。

それよりもこれはどういうことなのかしら。比企谷くんの右腕に
肢体を絡める一色ちゃんに彼の背中に抱きつき首に両腕を絡める妹
ちゃん。そして彼の膝の上を陣取り、抱きつくように胸の中に顔を埋

(うず) めている……………誰?

それからみんなが私のことに気づくまでに何時間時が流れたのか分からなくなる感覚に陥ったけど、実際はほんの数秒だったと思う。

えつと……………、君たち何してるの？

そんな言葉を私は投げかけた。

けど、返ってきた言葉は私の斜め上に行くものだった。

「見ての通り先輩に抱きついてます。ねー、せーんぱい」というのが一色ちゃん。

「あ、陽乃さん。やつはろーです。今、小町は兄の背中を揉んでるんですよー」となんか怪しい言葉を発する妹ちゃん。

「……………八幡の……………汗くさい…………………………」と顔を隠す女の子。

えつ、ちよ、ほんとこれどういうこと!?

さすがの私でも理解が追いつかないんだけど。

この中で一色ちゃんがまともに見えるのは気のせいかな……………。

妹ちゃん、それ絶対当ててるよね。

いや、それよりも正面から抱きついてる子！ もうヤバいところまできてるよね！

取り敢えず、比企谷くんから一旦離れてもらった。

落ち着け、陽乃。私は雪ノ下家の長女よ。並大抵のことでは動じないんだから、これくらいで動揺を見せてはいけないわ。しっかりするのよ、私。

まずは比企谷くんに説明を求めよう。

この子達じゃ、主観的にしかないだろうし。

で、返ってきたのは分からないという一言だった。

ただ、一番最初に抱きついてきたのはガハマちゃんなんだとか。そのうち一色ちゃんも抱きついてくるようになり、ゴールデンウィーク明けには留美ちゃん（正面から抱きついてた子で中学生なんだって）までもがこんな状態になっていたという。うん、まあ、いつかはこうなるかもしれないとは思ってたけど、それよりも妹ちゃん。「小

町はこれがいつも通り、というかぬるくらいですよ」ってどういこと!? お姉さん、もう頭痛くなってきたんだけど……………」

それから、比企谷くんはどうして嫌がらないのかを聞いたら、妹ちゃんはご飯抜きにすると脅してくる。

一色ちゃんはなんだかんだ言いくるめられて、既に諦めた。

留美ちゃんは断ると泣きそうになるから断れない。

ガハマちゃんは一度引っ付くと吸盤でも付いているかのように離れない。

なんだって。

雪乃ちゃんの名前がそこに出てこないのは雪乃ちゃんらしいわよね。

これだけみんなが欲望のままにしてるんだから、雪乃ちゃんも正直になればいいのに。

はあ……………心配で来てみたけど、すでに手遅れだったわね……………」

これからどうすればいいのかしら。

取り敢えず、今日は帰ろうかしらね……………」

「あ、はるさん先輩！ そこ、さつき先輩が紅茶こぼしたところまでだ——」

え？

椅子から立ち上がって扉の方へ向かおうと、足を切り返したら、つるんと滑る感触があり、地に足がつかない感覚が全身を包んでいく。

あ、やばっ！

倒れながら、今更気付いた。

私、超動揺している。

雪乃ちゃんが比企谷くんを取られるかもしれないから——

比企谷くんが誰かにとられるかもしれないから——

私の知らないところで私よりもみんな先に進んでいるから――

なんだ最初から何を心配してるのか心は分かってたんじゃん。

ああ、私も雪乃ちゃんのこと言えないわね。

.....。

.....。

痛くない？

衝撃はあったけど、どこも痛くない。

それよりも何この匂い。

それとあつたかい.....？

私が今の状況を整理していると「大丈夫ですか」と彼の声が耳元から聴こえてくる。

ツツ!?

え？ 何この感覚.....。

ちよ、これはさすがにやばいつて!?

なんか急に体が熱くなってくるし、彼の声が鼓膜を震わせてきて、何も考えられなくなってくるし。

しかもこれ、抱きしめられてるんだよね!? 比企谷くんに私抱きしめられてるんだよねっ!?

やばいやばいやばいやばいつ!!

こんな抱きしめられて彼の熱なんか感じちゃったら、いろいろとやばいよ。

それにこの匂い。比企谷くんの匂いだよね。ああ、だめ、脳が、脳に、.....だめえ。

はあ、はあ.....はあ.....はあ.....こんなのをされてたら、そりゃ、みんな落ちちゃう、よね.....。

だって、彼のこのフェロモンの匂いは、私たちには媚薬でしかない

んだから……。

千佳のターン

えー、どうも仲町千佳です。

突然ですが、最近の折本かおりは比企谷君に夢中である。しかし、学校が違うためバレンタインイベントを最後に会えていないらしい。かおりは日に日に比企谷成分が減少していったって、今では毎日のように比企谷君と葉山君とデーゴホンゴホン、放課後に遊んだ時のことやクリスマスイベントの話を毎日のようにしてくる。かれこれ半年前くらいは経ってるという話を永遠としてくるのだ。正直言つて面倒くさい。何が面倒って同じ話を二桁………三桁いくかもしれないペースで聞かされているのだ。強制的に。面と向かって。

私はあれから二人とは会ってないけど、比企谷君についてはかおりから毎日聞かされているため、最初の印象とは大分変わった。あんな暗い人の何がいいのか甚だ疑問ではあったけど、なぜか葉山君は彼を評価してみたいだし、かおりはかおりで日に日に「比企谷」という言葉を使う機会が増えた。

そもそも比企谷君って何者なんだろうね。

私がい実際に目にした比企谷君は根暗でデーウォツホンゴホン、お出かけのセンスのかけらも感じられないような総武高校の男子生徒である。それに彼はかおりと同じ中学で一度かおりに告白もしたことがあるんだとか。当時のかおりのことは知らないけど、あんなのに告白されたら、そりゃ断るよね。

なのに、クリスマスイベントで再会してからはかおりの中での彼の印象は大きく変わったらしい。その前にもあの二人とのお出かけで登場した女の子二人を見て、何かを理解したような感じであったが、それでもようやく比企谷君という者の理解に至ったらしい。なんでも彼はクリスマスイベントに総武高校の生徒会長から助っ人を頼まれてきたんだって。その時点で生徒会長に頼られるくらいの意外とすごい人なのかもって思ったけど、これはまだ序の口。もっとヤバイのはうちの生徒会長玉縄の轆轤回しについていたということだ。なんであの生徒会長ないし生徒会メンバーは同じ意味の言葉を並べ

るんだろうね。聞いてるだけで頭が痛くなってくる。

で、まあ話を戻すと比企谷君もあっち系の人なのかもという疑問が出てくるわけだ。前にあった時にはそんな感じを全く匂わせなかったのに………………。でもどうやらそれは誤解のようで、比企谷君自身、自分が何言ってるのか分からなかったんだって。逆に通じた方に驚きだったんだとか。ヤバくない？ 超ヤバイよね。かおりじゃないけどウケる。

要するに比企谷君はあんな見た目でも優秀であるということだ。そりゃ、総武高校に通ってる時点で頭いいのは確かだけど、なんとうかああいう感じの人っていわゆる引きこもりとかじゃない？ だから、彼もそうだとばかり思ってたんだよね。そういや前に葉山君が「人を上辺だけで判断しないでくれ」的なことを言ってたな。多分そういうことなんだろうね。私はあの一回しか比企谷君に会ってない。だから彼の人となり判断するには早すぎたのだ。それはかおりも同じ。いくら中学が同じだったからって、彼と親しかったわけでもないのに、同級生というだけで分かったようになっていた。だから、葉山君に怒られたんだ。

世の中、葉山君のように完璧な人ばかりではない。比企谷君のように見た目だけで判断してはいけないような人もいるということだ。いや、あの葉山君の印象ですらもちろしの思い込みなのかもしれない。彼の、彼らの何を知ってるのかと言われれば何も知らないと答えるしかないくらい、何も知らない。

葉山君、比企谷君、あの時は本当にごめんなさい。私が、私たちが間違っていました。見た目だけで判断するのはもうやめます。これからはちゃんとその人と接してから判断するようにします。だから、葉山君のこともっと教えてください。

なんて今なら言えるかもしれない。うん、やっぱ無理。恥ずかしすぎる。

なんて考えていた日の放課後。

私とかおりは街をぶらぶらしていた。特に目的があるわけでもな

く、かといって早く帰っても……………という受験生らしからぬ思いからである。なによ、少しは現実逃避くらいしたっていいじゃない！まあ、でも今はそんなことがどうでもよくなるようなものを目にしている。

あれはなんなんでしょうかね。

私たちの反対側を歩いていく六人の男女。

男一人、女五人。

両手に華どころか、四方を埋め尽くされて歩く目が腐っている総武高校の制服を着た男子生徒。

背中には一人だけ中学の制服をまとった女の子がおぶられて寝ている。

左腕には胸の大きなお団子頭の女の子が抱きつきたそうに体をうずうずさせている。

右側には綺麗な黒長髪の女の子が澄ました顔で男子生徒の袖を掴んでいる。

そして前には亜麻色の髪の女の子と肩くらいまでの髪のアホ毛が立った女の子、後ろ向きで歩きながら話しかけている。

……………え、つと……………

あれはマジでなんなの？

ハーレムってこの世に存在したの!?

というかあれ比企谷君だよね!?

両側の女の子は見たことあるし。

えっ？ なに、これ。どゆこと!?

そんな思いでかおりの方を見ると、すでにいなかった。

もう一度視線を彼らに戻すとかおりが六人のところに向かって走っていき、比企谷君に抱きついてた。

葉山君、ごめんなさい。人を見かけで判断するなど言われたけど。私もそうしないと誓ったけど。

さすがにこれは無理……………。

比企谷君は……………鬼畜だ。

めぐりのターン

六月のある日、久しぶりにはるさんから電話があった。最初は大学生になって二ヶ月経った気分を聞かれたりしたが、私はどこまで話したのかまるで覚えてないの。だって、はるさんが切る前に一言意味ありげなことをつぶやいたんだもん。

『比企谷くんの声って媚薬だよね』

そうこぼして、すぐに切られた。

一体どうしたことなんだろう。

比企谷君の声が媚薬って意味がわかりませんよ、はるさくん。

それからというもののずっとそのことが頭から離れなくなっていた。

講義中もそのことばかりが頭の中を走り回り、ここ一週間の授業の内容が全く思い出せないくらいには重症である。中間テスト終わっててよかったよ……………。

でもそろそろ気になりすぎて何にも手がつかない状態なので、母校へと来ちゃいました。

今日は由比ヶ浜さんの誕生日前日でもあるから、別に私が来ても何もおかしくはない、よね。

そして今は奉仕部のドアの前で深呼吸中。上を見渡せば白い表札がシールでデコレートされていた。前見た時よりもシールの数が増えているのは気のせいかな……………。それと驚きなのはちゃんとう奉仕部と書かれていることだ。学年が上がって新入部員でもはいつたのかな。

でもその下に小さく『私たちのご主人様の部屋』って書いてあるのはどういうことなんだろうね。ここって奉仕部だよね……………？ え？ ま、まさか?! そ、そういうことなの?!

だんだん強くなってきたけど、ここまで来たのだから心を固め、震える手で扉を開ける。やだ、私なんでこんなに震えてるの……………？

気になって聞いてみたら明日は比企谷君の二人でお出かけなんだって。それが由比ヶ浜さんが比企谷君におねだりしたプレゼントなんだとか。たぶん、「ヒツキーの一日をちようだいっ！」とか言われたんだらうなー。あ、やだ、私ったら……少女漫画の読みすぎだよ。それからみんなと楽しくおしゃべりをしながら、日が暮れるまで過ぎた。その間、いろんなことに気がついた。

まず一つ目はここにいる女の子全員が比企谷君が好きみたいである。あの雪ノ下さんまでもがそんな気を俄かに感じさせてくるの。まあ、由比ヶ浜さんは出会った頃からだし、一色さんも留美ちゃんも私が来た時から彼に抱きついてる時点で確定。問題なのは妹の小町さんである。彼女は妹なのである。血の繋がった妹なのである。なのに彼女の比企谷君を見る目が時折妖しいものなっている。ふとした仕草でも彼の欲望を引き出すような、そのなんというか………い、色を帯びているのだ。

それから二つ目。たぶんこっちはもつと危ない。そんな小町さんをよく見てみると………その………あう、恥ずかしいよう………なんでこんなことしてるの………えっ、とね、小町さんがパ………下着をつけてないような気がするの。気のせいだったらしいんだけど、スカートから………その、下着らしきものが見えないの。暗くてよくは見えなかったし一瞬だったからアレだけど………絶対アレ肌の色だよお。

というか比企谷君にさりげなく触らせちゃってるし………。ねえ、二人つて兄妹だよねっ!? 血の繋がった兄妹なんだよねっ!? 三つ目は三つ目で危ないよお。なんで留美ちゃんは比企谷君の匂いを十分に一回は嗅いでるのっ!? 留美ちゃんそういうのはまだ早いよー。私だっただけのことないんだからー。

という彼女たちの危険な行動に私の頭はパンク寸前だった。それになんだかみんなを見てると体がムズムズしてきちゃった。なんというか私も男の子に抱きついてみたい………なんて。比企谷君だったらちゃんと受け止めてくれるかなー。私比企谷君だったら

………って私今何考えてたのっ!? それはだめだよっ! いろいろとダメなんだからね!

そしてそろそろお暇しようとして立ち上がった時、事件は起きた。

彼女たちに当てられ、ムズムズしていた私の体は立ち上がれるほどの力も無くなっていたようで、立った瞬間自分の体を支えられなくなってしまった。

ああ、私………このまま頭ぶつけちゃうんだ。

そう思っただけで覚悟を決めていたのに、倒れた痛みはあっても頭には一切衝撃が来なかった。それよりもなんだか甘い匂いがする。それに頭に人の熱を感じる。なんだろう、この匂い。段々私の体を内側まで溶かしていくような、脳をおかしくさせて何も考えられなくなっていくこの甘美な匂いは一体なんなんだろう。あつ、やだ、今なんか背骨に電気がピリッってっ!?

え? なに、これ………?

痺れるように体が動かなくなっ………く………うツツ!?

や、これっ、きもちいいっ!? 痺れて、ピリピリして、痛いはずなのに!?

き、きもちいいいいいいっ!?

「城廻先輩」

あ、………えっ? 比企谷君?

だめだよ、今そんな声で私を呼んじやだめだよお。

余計にきもちよくなっちゃうからあ。

「怪我はないですか」

耳、耳元でしゃべらないで!?

くすぐったくて、刺激が強いよお。今こんな刺激受けたら、私

………わたし………

「………いいですよ」

………ツツツツ!?

な、に………これ………。

わたし………こんなの………初めて………。

はあ……………はあ……………はあ……………。

ひどいよ、比企谷君。最後にあんなに優しく頭を撫でられて強く抱きしめられておまけに耳元で囁かないでよ……………。しかも絶対バレてたよ、あれ。……………。恥ずかしい。

でも、うん。なんか分かった気がする。はるさんが言ってた「比企谷君の声は媚薬だね」っていうのはこういうことだったんですね……………え？ あれ？ ていうことははるさんも比企谷君に……………？

ツツツツツ!?

やだ、なんか背筋にゾゾゾってした。寒気？ でもないし悪寒でもない。なんとというかゾクゾクするというか興奮するとか。って私何言ってるのっ?!

これじゃ比企谷君に落とされるのも時間の問題だよお。あんまり会わないほうがいいのかな？ でもそれはちよっと寂しいな……………。

比企谷君に、ご主人様にもっと頭撫でて欲しいな……………。

沙希のターン

三年になってから私は比企谷の隣の席になった。その時によろしく私の名前を間違わなくなった。意外と今まで席が近くなるということすらなかったから、どこか新鮮さも感じられる。これで気分良く新学期を迎えられて受験モードに入ることができる。

最初はそう思っていた。

二ヶ月経った梅雨空の季節。

比企谷との関係はいたって良好だ。

お昼にはおかずの交換をしたり、休みの日にはけーちゃんと三人で遊んだりもしている。ゴールデンウィーク前に一度、公園で比企谷とバツタリ出会い、それからけーちゃんとの遊び相手になったりしてくれている。何気にあいつは小さい子の面倒見は人一倍良く、けーちゃん是最初っから比企谷に懐いている。そりやもう、こっちが嫉妬する具合には。どちらに対してなのかはわからないけど。

だけど、それはどうやらあたしが特別だからってわけじゃない。あたしの他にもクラス内じゃ由比ヶ浜とかがその例に上がる。学年が上がってからはしよっちゆう抱きついてるし、あたしが横にいても構わずベタベタしている。比企谷も比企谷で彼女の胸にご執着のようで、嫌がるそぶりを見せない。以前だったら嫌がりそうなものになんか……。他に近い席のやつで言えばあいつの後ろを陣取る相模。一見何の関わりも持っていないなさそうな二人であるが、去年の文化祭後ではかわいそうなお姫様と最低の男として学校中に噂が広がっていた。次第に収束したものの、あたしは今でもそのことを覚えている。まあ、どうせあいつがまたやらかしたんだろうけど、見ていていい気分じゃなかった。だけど、当の本人は特に気にしてるそぶりを見せないの、あたしはその話には触れないようにしていた。

なのに、学年が上がって席が近くなったことで、相模に変化が起きた。目の前で由比ヶ浜とイチヤイチャしてようが気にしなさそうないつが、ある日消しゴムを投げってきた。それが二ヶ月くらいは続き、今

では比企谷の背中や脇腹に攻撃を仕掛けている。端から見ているとただ気がある男子にちよつかい出しているようにしか見えない。そんな二人というか三人というか、を見ていてなんかモヤッとした蟠り？
みたいなのがちくつと胸を刺す。別に由比ヶ浜のように抱きつきたいわけでもない。だからと言って相模みたいにちよつかいを出そうとも思わない。なんというか、そう、やっとできた話し相手が取られた気分……………みたいなの？

ああ、話し相手と言ったら、もう一人危険なのがいる。

海老名姫菜。

このクラスの、果てには学校一のトップカーストに属する赤縁眼鏡女子。ひよんなことからあたしは彼女に気に入られてしまい、たまに話しかけてくる。主に比企谷と葉山のカップリングがいいよねー、とかいうあたしには理解し難い内容だけど。それでもまあ、こんなあたしにも話かけてくるような女子である。

だが、あたしの知らないところで比企谷は彼女までもを落としていた。本当にいつそんなイベントがあっただろう。

彼女はあたしと交代でお昼に比企谷に会いに行っている。いわゆる密会というやつだ。たぶん、雪ノ下あたりは知ってそうだけど。あれもあれで怖い。朝から比企谷を見張るようにそつと陰に潜んでいるのだ。通報しようか迷ったくらいだ。そんな彼女が知らないわけがないよね……………。

で、話を戻すと海老名は比企谷がこよなく愛するベストプレイスと呼んでいる場所に行つてはいろいろ話したり触ったりしているらしい。なんでそれを逐一あたしに報告してくるのかは疑問だけど、ちよつとやりすぎじゃないかと思うようなこともやっている。比企谷に抱きついて匂いを嗅いで胸に顔を埋めているんだつて。それがまた落ち着くのなんのと言つていたが、ある意味由比ヶ浜よりアウトかもしれない。由比ヶ浜は公衆の面前で抱きついているため、なんとか周囲の目によって抑えられているが、海老名の方は人目のないところで一体どこまでしているのやら……………。あ、べ別に羨ましいとかそういうんじゃないからな。

とにかく！

今の比企谷にはどこかモヤモヤしたものを感じるのだ。なんか手が触れたりするだけで体が急に暑くなってくるし、おかずの出来栄えを比企谷に褒めてもらえると素直に嬉しい。会話がなくても二人でお昼を食べている時の空気は心地いいのだ。

でもそれがあたしだけじゃないってのはなんか……こう、ムカつく。比企谷のくせに生意気というか、……うん、やっぱりムカつく。

そもそもなんで比企谷はあんなに女の子に囲まれるようになったんだろうか。やっぱり文化祭の時みたいなふざけた言動が後々に響いてきているんだろうか………。あれ？ でもまずそういうのってあいつが誰彼構わず言うことはないはず………っ!?
え？ なに？ まさか、そういうことじゃないよね？

この目の前の男はハーレムなんてものを築こうとかしてないよね？

あ、でもそれだったら、いろいろと納得はいく………ね。こいつの妹の小町も最近では兄を見る目から男を見る目に変わってきているし。あれもよく抱きついてるし、そういやいつだったかクリスマスパーティーで主役をしていた女の子を昇降口で見かけた気がするし。

え？ マジ？

さすがにそれはヤバくない？

あ、でも年下には優しいし………ロリコン？

あの生徒会長にも甘いつて話だし。

え？ じゃあ、けーちゃんもいつか狙われる………というかもう………？

うそ………うそ………妹に？ 取られる？ 妹を？ 取られる？

ああああああああああああああああああああああああああああ

あっ!?

もうわけわかんない!?

とりあえず、何かが取られていくことは分かったから、もうこの話はなしっ!

妹は絶対に渡さないし、比企谷も誰も渡さないんだから!

「おーい、川崎。お前、今ものすごい顔になってんぞ」

ひっ?!

こ、こここのバカッ!?

いいいいいきなり話しかけてこないでよ!

ちよ、なんで頭触って?!

あ、また……………うう……………。

「前にけーちゃんが『さーちゃんはあたまをなでられたことすくないからたまにははーちゃんがやってあげてね』って言っててな。そんなお前を見てたら、俺の百八あるお兄ちゃんスキルがオートで発動しただけだ」

なんて顔を赤くしてそっぽを向きながら言ってきた。

なんなのよ、あんた。

その適度に刺激を与えてくる感じ、ほんっとムカつく。

ああ、なんかもうどうでもいいや、思ってしまったあたしにもムカつく。

ずるいんだよ!

このバカ、ボケナス、八幡!

ふふっ。

かおりのターン

ああー、比企谷に会いたい……………。

比企谷に会いたいー……………比企谷に会いたいよー……………。

最近のあたしは何かがおかしい。まあ、何かとは言ったけど原因はわかっている。

比企谷だ。

あの捻くれ者にバレンタインの時から会えていない。それが今のあたしのウケない状況を作り出している原因である。

最初はほんの偶然による再会から、クリスマスイベントやバレンタイン手作りチョコ教室を経て、比企谷という存在を改めて見返してきた。中学までのつまらない比企谷とはまったく違うなんか新鮮な比企谷になっていた。

うん、まあそれだけだったんだけどなあ……………。

それがここ最近、んー具体的に言うとな春休み前くらいからかなー。なんか無性に比企谷に会いたくなかった。千佳に言ったら遊びにでも誘えばいいじゃんって言われたけど、連絡先とか知らないんだよね……………。聞くタイミングがなかったというか、ここまで頭を埋め尽くしてしまうような存在になると思ってなかったからさー。聞きもしなかったんだよねー。あーあ、あの時のあたしってほんとバカだよねー。ちゃんと聞いときなさいよ。

で、今に至るんだけどねー。総武高校に乗り込もうかと思っただけど、というか千佳を巻き込んで校門前まで行ったけど、いざって時に足がすくんじゃうっていうね。超ウケる！そのまま梅雨入りまでしちゃったけど、まだ比企谷に会えていないあたしって意外と臆病だったのかね……………。いや、でも他の男子にはそんなことないし、逆にあの生徒会長は苦手なまであるからなー……………ぷくくくっ!? なんかこの言い方、比企谷みたいで超ウケる。

そんなことをいろいろと千佳に話した。愚痴も込めて話した。もししたら、千佳が「比企谷くん」って言おうとしたのを「比企谷きん」っ

て風に噛んだ。……あつはははははっ!? ヤバい! 思い出しただけで超ウケるんですけど! バンバン机を叩いちやうくらい笑いが止まらない!

………はあ………はあ………、とまあ何が言いたいかといえば、中学の時に比企谷菌っていうあだ名があつたなー、っていうことだ。で、その比企谷菌つてのが最近妙に引つかかるのだ。なんというかあたしも感染してるんじゃないだろうかという風に。

寝ても起きても頭の中はいつの間にか比企谷のことでいっぱいになつてるし、その周りにいる女の子の姿も見た回数が少ないのに、妙に顔まで思い出せてしまうのだ。しかも比企谷にしばらくというか四ヶ月近くも会えてないからか、比企谷のことを思い出すだけで、胸がきゆうつと締め付けられる感じがする。体は熱くなつてくるし、呼吸も荒くなつてくる。しまいには触りたくなる始末。これは比企谷菌に感染しているとみてもなんらおかしくはないよね。

さて、どうしたものかね。あたしがこんなことになるなんて、しかも比企谷に対してだなんて夢にも思つてなかつたからなー。それに比企谷のことは一度告白されてふつてるんだよね……。まあ、でもあの時の比企谷じゃこんな気持ちにもならなかつただろうけど。だから、惜しいことをしたとは思わないし、あいつもそんなこと思つてもないよね。前にそのことをさりげなく話したら、今はそんな気はないって言つてたし。あたしもその時はなんとも思わなかつたはずなんだけど、その言葉を今思い出すと胸が苦しくなるのはなんでなのかなー。

それから六月の中頃、あたしと千佳は街へと繰り出してきていた。受験生だけど、たまには息抜きも必要じゃん。しかも最近じゃ比企谷のことで頭がいっぱいで、勉強にも集中できない。元々勉強にさほど興味があるわけでもないけど、周りの空気に流されてぼちぼちとやっている。といつても千佳とやってるから全く進まない。なんて考えながら隣を歩く千佳を見ると足を止めてどこかを眺めていた。不思議に思つたあたしも彼女の視線をたどる。

ツツツ!?

ヤバい!?

え? なにこの感じ?

ヤバいやバいやバい、なんかよくわかんないけど超ヤバい!

と思つたら体は正直なようで勝手に視線の先にいた目の腐った総武高校の制服を着た男子生徒に抱きついてた。

ああ、そうそうこの感じ。この匂い。落ち着くわ。

すりすりと男子生徒の胸に顔を擦りつける。次第にぐりぐりと力強くなつてるのは気のせいだよ。

「え? ちよ、なに? これ、どゆこと!」って低い声が頭の上から聴こえてくる。おお、おお、今日も通常運転でキョドってるねー。ヤバい、なんか無性に嬉しくなってきたんですけど!

「ちよ、その人! 先輩に何してんですか!? そこは私の場所です!」という声や「ちよつとあなた。いきなり抱きつくなんて不躰けにも程があるわ。離れなさい!」という冷たい声や、「ふおおおおおとおお!? また、新たなお義姉ちゃん候補が!」……………って、かおりさんか」という聞いたことのある声が聞こえてくる。だけど、今はそんなことはどうだっていい。あたしはあたしの欲望に従うのみ! うへへへへっ、・比企谷く、会いたかったよー。

この後、みんなに(もちろん千佳にも)怒られました。まあ、怒ってるのを聞いてたら、比企谷の周りにいた女の子は全員比企谷菌に感染してるっぽかったけど。あの比企谷の妹まで女の子でしたよ! どうしよう、超ウケる展開なのに全くウケない……………。

それによく考えてみると、今の比企谷って女の子五人に囲まれて歩いてたってことでしょ。しかも一人は中学生ってどういうこと!?! 全員顔は覚えてるけどさー、なーんかこう胸のモヤモヤが広がってるんだよねー。

で、今はなぜかみんなでサイゼにきている。比企谷の尋問を行うとかいう理由で、あたしたちも連行されてきた（千佳はただの被害者だけだね）。比企谷兄妹はついでに晩御飯も済ませてしまおうってことになったようで、がつつり頼みだした。といってもミラドリとマルゲリータを比企谷が頼んで、妹の小町ちゃんの方がサラダとスパゲッティを頼んだだけだけど。後はデザートとかを適当に頼み、全員が長話になることを見越してドリンクバーをつけた。中学生の留美ちゃんだっけ？ は比企谷がお代を持つらしい。さすがに中学生を付き合わせるんだからそれくらいはな、って言ってた。変なところで律儀って言うか面倒見がいいってどうか。

それから比企谷が一人、ドリンクバーを取りに立ったので、女の子だけの時間になった。そこであたしは疑問に思っていた比企谷菌感染の有無について聞いてみた。まあ、まずは比企谷菌についての説明からだっただけど、説明したらどうやら全員心当たりがあるようで。あたしの症状に似ているのが、生徒会長の一色ちゃんと雪ノ下さんで、留美ちゃんと由比ヶ浜さんはあたしたちの症状をより悪化させたものだった。小町ちゃんは、その………なんというか全員がぶっ飛ぶようなことを平然と口にしてたってことだけは言っておくよ。あたしの口からとてもじゃないけど言えない。超はずい。

それから食事をすませ、再び比企谷が席を立ったので、話がまた戻った。で、なんと雪ノ下さんのお姉さんが比企谷の声やフェロモンは媚薬だって言ってたらしい。というかお姉さんまで落ちてるよね。なにそれ、超ウケるんだけど。

そして、みんな一斉に気がついた。それは比企谷菌というフェロモンが媚薬効果を持っているという事実。しかもそれはあたしたちにしか効かないんだとか。理由は比企谷のことが好きだから、だって………。

え？

ん？

あれ？

ということはあたしって比企谷のこと好きなの？

つい思ったことを口に出したら、今更!? って驚かれた。みんなでハモるとか超ウケるんだけど。

でも、そっか。

あたしは比企谷のことが好きなのか。

うん、まあ、それなら納得……………かな。

でも、あたしがねー、比企谷をねー。

なにがきつかけなんだろうね。

意外と超どうでもいいことだったりして……………。

うわっ、超ウケるんですけど！

姫菜のターン

はろはろー。

サキサキのいう赤縁眼鏡の・姫菜さんだよー。

取り敢えず、これ聴いてねー。

『……………ちよ、あの、海老名さん?』

『なにかな、ヒキタニ君』

『あつ……………その、えと……………』

『んー?』

『俺の太ももを撫で回すのはやめてもらえませんかね、ちよ、マジで!』

『いやです、とエビナはあなたの太ももを撫でる力を強めながら拒否します』

『ちよ、おまつ!? そこは?! つか、なんでどこぞのクローン体みたいな口調になつてんだよ』

『ええー、いいんじゃない。減るもんじゃないんだし』

『減るからっ!? 思いつきり俺の精神がすり減ってるからっ!?』

『またまたー。ヒキタニ君もこういうの好きでしょ?』

『だ、だから、その手を離あああああああつ!? な、なにしやがる!?! さすがにそれは洒落になんねーって!』

『だめだよー、そんな大声出しちゃ。誰かに聞かれないんだったら、話は別だけど』

『うっ、……………ならその手をどうかしてくださいお願いします』

『おおー、意外と威勢がいいね』

『潔い間違いでしょ』

『ん?』

『ん?』

『あ、そうだったね、こっちも見せないとだめだよね。もう、ヒキタニ君はマニアックなんだからー』

『はっ? って、ちよっと待て!? なんでそこでスカートをめくる!?!』

『え？ だってヒキタ二君はこういうのが好きでしょ？』

『さつきと同じニュアンスで言ってきたけど、それ絶対意味合い違うだろ』

『ほれほれー。なんなら触ってみそ』

『からかうのはやめてくださいお願いします何でもしますから許してください！』

と、ここまでだね。

ねえ、このヒキタ二君かわいくない？ かわいいよね？！

普段、女の子に囲まれてるヒキタ二君がこんないたずらで顔を真っ赤にして焦った声を出すなんてかわいいよね。あーもー、最近のヒキタ二君は単体だけでもいいわ。

これもアレだね。結衣たちがヒキタ二君に抱きつくようになってくれたおかげだね。

事の初めは春休みに入る前の三月の中頃。

その日、結衣の我慢がとうとう解かれた。

休み時間になるとヒキタ二君に抱きついて、彼の腕を豊満な胸に挟み、顔を腕にすりすり擦り付け始めた。いきなりの事でみんな何事かと思つたよ。もちろんヒキタ二君もね。けど、それは毎日のように続き、今ではクラスの風景の一部となっている。

でまあ、それがきっかけとなってヒキタ二君はいろんな女の子から抱きつかれるようになったんだよねー。私が知ってるだけでもいろはちゃんとヒキタ二君の妹ちゃんがよく抱きついてる。いろはちゃん言葉巧みに否定してるけど、みんなのヒキタ二君への好き好きオーラが増していつている。

だからまあ、いいかなって。

私もこれに乗じて参加しようかなって。

彼は私に一度、嘘だけど告白してきている。戸部っちの告白を躲すための手段だったのは分かっている。それも私がお願いしたから。こ

んな手段で来るとは思わなかったけど、戸部っちの告白だけは避けたかったから。告白されたら私は彼を振るしか選択はない。それでは今の居場所は壊れてしまう。そう思ったから、なんでも分かっちゃう彼にお願いした。あんなの、誰にも理解できないはずなのに。彼は理解していた。

ああー、今でもあの告白が頭から離れないってのはちよつとヤバイよねー。それと駅で話した時の事も鮮明に覚えている。いやー、私としたことがやっちゃったかなー。高校生のうちは恋をしないようにしてたのになー。

それがあんな嘘の告白で心が動いちやう私ってどうなんだろう。アニメや漫画じゃよくある展開だけど、それを私が実行する事になろうとは……………。

それも全部ヒキタ二君が悪いんだよねー。誰も理解してくれなかった事を理解していたり、少ない言葉で私のピンチを察して助けてくれたり。方法はまあ結衣たちからしたら申し訳ないものだったけど、それでも嬉しいと感じてる私がいるんだから、私も酷い人間だよね。

だからさー、この感情は後の一年半は隠し通そうと思ってたのに、まさかあんなのを目の前で見せつけられたらねー。しかもヒキタ二君もヒキタ二君で全く嫌がらないし。いや、最初は嫌がってたけどさー。毎日続くと彼の悪い癖が出てきて、すぐに諦めモードになっちゃったからね。うん、もうこれはヒキタ二君が悪いって事でいいよね。

なので、私はついに三年になったばかりの四月のある日の昼休みに動いたわけですよ。基本一人でお昼を取るヒキタ二君を追って奇襲をかけた。まずは適当な会話から始めたけど、思いの外話が弾んじやった。だから、毎日でも一緒にいたいって思っちゃったんだけど、現実はそうもいかないんだよね。三年になってからのヒキタ二君の席の隣にはサキサキがいる。そうサキサキが！

あの子もなんやかんやでヒキタ二君のこと好きだから、これを機におかずの交換とかをやってヒキタ二君の胃袋を掴みにかかっているわけですよ。なんかヒキタ二君の方も三年になってから妹ちゃんがついでにお弁当を作ってくれるようになり、家庭の味比べに和んじやつてる始末。だから、私はサキサキと交渉しました。一日交代でヒキタ二君と過ごしましょう、と。まあ、サキサキはあれで押しに弱いからね。赤くなるサキサキもかわいいからちよつと意地悪したくなっちゃうのは仕方ないよね。

で、その密会とも言えるお昼の時間の一部始終が最初に聞いてもらったやつってわけ。

実はあれには続きがあるんだよー。

聴く？ 聴きたいよね？

『へー、何でもしてくれるんだ』

『え？ あ、その、俺に出来る範囲ではの話ですけど』

『何でも、してくれるんだよね？』

『あ、ちよ、その、近すぎやしませんかね、海老名さん』

『してくれるんだよね？』

『あ、はい……………ヨロコンデサセテイタダキマス』

『じゃあ、そのまま動かないでね』

『え？ あの、海老名さん？ つて、ちよ、なんで正面から抱きついてきてるんですか!?!』

『ああー、これかー。……………すうー……………はあー……………あああッツ!?! や、これ、結構くるかも……………あつ、……………すご、い……………』

『由比ヶ浜じゃあるまいし、そんなに匂い嗅ぐなよ。それと変な声を出すのもやめてくれ』

『ねえ、ヒキタ二君。……………抱きしめて』

『え？ あの、それは……………さすがにまずいんじゃないでしょうか?』

『なん、でも……………はあ、はあ……………してくれるん、でしょ?』

『はあ……………。一回、だけですよ』

『ふわっ!? これ、いいかも……はあはあ、もつと……もつと、強
くして』

『……』
『あつ、あつあああああッッ!? だめえ、これ……はあ……ヤバいく
らい……はあはあ、きもち、いいっ?!』

『……』
『ふわあああああああッッッ?!? ちよ、ああつ、ヒキタニ
くんっ!? それ、だめっ、動かしちゃっ、だめっ! あし……あ
あんっ、うごかしちゃ、ひぐう……、ああそれだめえええええ
えええええええええッッッ!』

今じゃ、結構というかどつぷりハマっちゃたんだよね、これ……。
だって、きもちいいもん。

しかもこの時のヒキタニ君の目が冷たくてゾクゾクしちゃう。

あと、彼の匂いも私を狂わせるから。

うん、全部あの匂いが悪いんだよ。

小町のターン

うちの兄はなんだかんだ言って、根は優しい。

意地を張ったり、苦しい言い訳をしたり、自論の世界の言葉をこれでもかというくらいにこねくり回すけど。それでも兄はいつだって優しい。

そんな優しさに惹かれた女の人がここ最近急増化してきている。きっかけは去年、兄が平塚先生に連行されて強制入部させられた奉仕部。そこで雪乃さんと結衣さんに出会ったことが、大きな要因だと思う。中学までの兄は変な噂ばかりが立てられているような存在だった。いじめこそない、というかちゃんと認識すらもされていなかったがために出た噂がほとんどだった。

そんな兄も高校生になったんだと思ったら、初日から車にひかれるなんて思わなかったけどね。あのごみいちゃんはなんでそういうときに限ってやらかすのかな……。妹として情けないよ……。でも、そうなのです。小町は妹なのです。千葉に住む血の繋がった兄妹なのです。だからあんなお兄ちゃんのことを愛おしく思っちゃったりするのは、ただの家族愛なのです。

ってなればよかったんだろうなー。

あれは小学生のとき。

親は共働きでしかもそのころには社畜人生まっしぐらだったので、小町が家に帰ると誰もいませんでした。最初は仕方がないと割り切っていたはずなんだけど、そこはやっぱり幼かったというか、日に日に寂しさを募らせていきました。ある日、我慢が出来なくなり家を飛び出してしまいました。日が沈み出し、影が濃くなっていくのを眺めながら、今頃お兄ちゃんは心配しているのかなーとかぼんやりと浮かべながら、だけどその影が自分を飲み込むように見えて怖くなり、公園の遊具の中でうずくまって泣いていました。帰りたいたいけど今更帰れない。兄に会いたいけど会いたくない。そんな葛藤が頭の中で

せめぎ合い押しつぶされそうになっていたときに、お兄ちゃんは小町を見つけてくれました。それはちようど逢う魔が時。その言葉を知ったのはずっと後のことだけど（お兄ちゃんが病気にかかった時に言ってた）、大体そんな時間だったと思う。

その翌日からはお兄ちゃんは小町よりも先に帰宅するようになり、寂しさは無くなりました。代わりに変な気持ちが始まり、なぜか兄を愛に意識してしまうようになってしまいました……こればかりは小町の一生の不覚であります。

さすがに兄妹でそんな感情を抱いてしまうのは気の迷いであり、弱い心を覗かれてなお優しくされたのが原因で心のよりどころにしてしまったただの勘違いだと、自分に言い聞かせました。

それから五、六年経った高校受験も終わり春休みを目前に控えたある日。

兄の様子がちよつと変わりました。

なんというか小町を意識してしまっているのか、時折顔を赤く染め上げるのです。

学校で何かあったのだろうと思い、詰め寄ったところ案の定結衣さんが原因でした。いきなり抱きついてきたかと思うと、休み時間になる度にひっついてきて離れてくれない。しかもあの豊富な胸の中に腕を絡めてしまうから、おかげで愛に意識してしまってる、と。それだけならまあいつものことかな、と流せたのに、この後に発せられたお兄ちゃんの言葉がそれを許しませんでした。

「小町のことまで愛に意識してしまって申し訳ない」

普通の謝罪であるはずなのに、その言葉は小町のこと”女の子”として見ているという風にも聞き取れてしまったのです。

押し殺してきた感情は再び表へと引つ張り出されてしまいました。抱いてはいけない感情に小町はもうあらがう術を失ってしまい、決壊しました。

いやもう、ほんと。

こんなシリアスな空気なのにここからの小町はどうかしている。

次の日から小町は段々と部屋着の露出が多くなっていきました。

兄のおさがりのぶかぶかのTシャツを着て、何も無い肩を見せたり。

超短いホットパンツを履いて、その白地の布を見せたり。

はたまた、兄のぶかぶかTシャツ”だけ”をまとい、膝の上に座ったり。

兄の欲望を煽るような行為は日に日にエスカレートしていき、ついにはお風呂上がりタオルだけ巻いて抱きついたりもした。お兄ちゃんは戸惑いはしても嫌がるそぶりは一切見せず、ただただ小町の為すがままだった。

いや、この時のお兄ちゃんは顔が真っ赤でめちやくちやかわいかったんですよ。あれは写真に残しておけばよかったなーと今でも後悔してるくらいですよ。

で、まあそこから小町のスイッチも入ったといえますか、お気付きの人もいる通りの露出癖ができたと言いますか。あ、別にどこでもやってるわけではないですよ。そう、ちゃんとお兄ちゃんの前”だけ”という縛りはあるのです。

こうなったのもお兄ちゃんの小町を見る目が日に日に怪しいものになってきて、お兄ちゃんの方からもボディタッチをしてくるままでにあって、そこに不覚ながら快感を覚えてしまったのが原因なのです。だから小町が悪いわけじゃない。お兄ちゃんが悪い。

具体的には学校じゃ奉仕部にいる時だけだし、家にいる時も下着以外はちゃんと着ています。だから大丈夫です。

まあでも、そろそろお兄ちゃんが欲望に耐えられなくなって小町を襲っちゃうかもですけど。その時はその時です。受け入れるまでですよ。今でもお尻とか家の中じゃ普通に触ってくるし、そんな日も近いかもしれないなー。

お兄ちゃんたちが三年になってからはみなさんやる気なようで自

分の欲望に割と忠実に行動していて、誰かそのうちやらかしそうだけど。夏休みに入ればお兄ちゃんの誕生日もあるし、いつそそこでみんなをモノにしてもらうというのも一つの手かも……。……。参加者はえつと……。雪乃さんに結衣さんにいろはさんに、あとは陽乃さんとめぐりさんもですね。それに留美ちゃんと……。沙希さんも呼ばないと泣いちゃうだろうなー。見たことないけど相模先輩や海老名先輩という人らも呼ばないと後が怖いし、あまり呼びたくはないけどお兄さんも知らないところから聞きつけてきそうだから最初から誘っておかないと……。……。

うわー、こうして名前を並べてみるとやばいね、お兄ちゃん。十人も知らずに落としてるとか鬼畜としか言えないよ。しかも肩書きがまたやばい人たちだし。校内一の秀才にトップカーズに君臨する人に生徒会長に魔王に前生徒会長に中学生にシスコンにツンデレに戸部先輩の好きな人に中学の同級生、あと実の妹。もうお兄ちゃんこっただけいるんだから、一人とは言わず全員貰っちゃいなよ。そうすれば毎日乱れた生活にどっぷり浸かることが……。ああ、想像しただけでゾクゾクしてきちゃった。足に冷たい雫がつつつと垂れていく感触が伝わってくる。ああ、ちよつと興奮してきたかも。そういうのもアリだよ、お兄ちゃん！ それにこんだけいればいろんなプレイを楽しめるんじゃない？ お兄ちゃん、結構マニアックなものもあるはずだし。

そうと決まれば早速ハーレム計画に取りかかりますか。

決行はお兄ちゃんの誕生日。

それまでにみんな行けるとこまで行けるように煽らなくちゃ。

もつと際どい露出にすればお兄ちゃんも周りのみんなも理性が飛ぶのかなー。

明日試してみよう。